

ヒシを食べる動物についてのエッセイ

伴 幸 成

昨年8月8日、水草研究会が倉敷で催された折、エクスカッションで案内していただいた百間川の橋の上から、オニバスとともに、異様に赤っぽく変色したヒシ群落が見えたはずだ。あのヒシ群落は、9月初旬には腐り始め、葉と茎がバラバラになって一粒の実も捻らせることがなかったに違いない。

またあいつがやってきたのだ。

富栄養化の進んだ琵琶湖で、1977年に飛躍的な分布拡大を成しとげほとんど無敵とも思われたヒシ群落は、1979年に未曾有(?)の大被害にみまわれることになった。ヒシハムシである。その年の夏には、葉という葉の上に交尾するために重なった成虫の姿が見られ、白い卵塊がそこらじゅうに産みつけられていた。

1979年には、広大なヒシ群落が、ほんの5ミリほどの小さな甲虫に食い尽されてしまったわけだが、翌年には、この小さな甲虫はさらに小さい虫によって食い尽されてしまうことになった。ミズカメムシである。

東南アジアでは、天をおおうばかりのトビロウソウの大発生が、小さなメクラガメの一種によって押さえられていることが知られており、日本の水田でも、ウンカ・ヨコバイ類の天敵と考えられるケシカタビロアメンボが夏期に異常な高密度に達することを、以前私達が報告したことがある。ミズカメムシがこれらのカメムシに近縁のアメンボの一種であることを考えると、体が小さい(

約3ミリ)にもかかわらずヒシハムシの有効な天敵となっていることにも納得がゆく。

続く1980年には、前年のようなハムシの大発生は見られず、1981年に、ヒシをめぐる水生昆虫の写真を撮ってもらうためにプロの写真家を伴って琵琶湖を訪れた時には、皮肉にも一匹のヒシハムシも見つけることができなかった。

このようにヒシハムシの大発生と崩壊とがごく短期間に生じたのは、ヒシハムシとミズカメムシの年間世代数が比較的多く、高い増殖率を示すためと思われる。残念ながら、去年は琵琶湖のヒシ群落を見る機会がなかったのだが、今年はまだ赤く変色したヒシ群落を見ることができのかもしれない。

ヒシを食べる動物として、琵琶湖では草食魚のワタカも重要である。ワタカの群れがやってくると、そうとう大きなヒシ群落でも、一夜にして葉が食い尽されてしまう。

また、奈良公園では、ヒシはある水深以上のところしか生えないらしい。ある水深とはシカの背丈のことである。シカは好んでヒシを食べているらしい。

佐賀県には「ヒシ摘み歌」という民謡があるが、人々がクリークにたらい舟を浮かべてヒシの実を採る時に歌ったものである。ここでは人類もヒシの天敵となっているようだ。(愛知県立西尾東高校)

ホテイアオイを喰べる野鳥

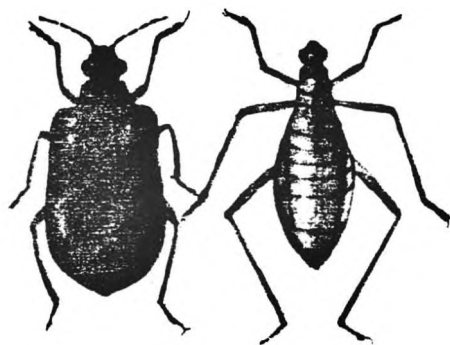
齊 藤 吉 永

ホテイアオイ *Eichhornia crassipes* (Mart.) Solms. は一般の家庭でも愛培されているが、文献によれば英国に入ったのが1879(明治12年)というから今から僅か100余年に過ぎない。

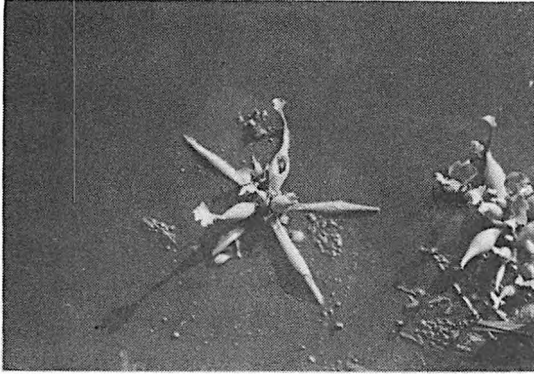
日本に渡来した時期は詳やかではないが明治年代には間違いないようである。

1902(明治35年)に新宿御苑から台湾に3株が送られたという記録があるらしいので明治の中頃にはすでに日本に入っていたのかも知れない。

暖地では害草扱いされている報道も見受けられるが、養豚場などで汚水処理に一役買って好成績を上げたということも聞いている。目下全国一汚れているという千葉県立公園でもある手賀沼で2年前から県環境部水質保全課が実験的に栽培を始めている。



(左) ヒシハムシ、(右) ミズカメムシ
(「アニマ」No.113より)



初年度の昭和56年度は12,500株を県内の繁殖地から移植して3ヶ月後には重量で約250倍に達し、沼から窒素560kg、リン100kgを吸収したことが調査の結果判明したので、2年目の昨年(昭和57年)度は県と関係町村(5市3町)では28,000株を面積で前年の約10倍に当たる5haに21ヶ所(56区画)に移植して3ヶ月後に調査すると重量で400倍と好成績であった。

ところが台風の相つぐ襲来と不順の天候にさまたげられて最終的には計画重量の1/15にとどまったという。

そのうえに野鳥(カイツブリ科のカイツブリ *Podiceps ruficollis boggei* Reichenow とクイナ科のオオバン *Fulica atra atra* Linnaeus) がホテイアオイの若葉を喰うためであることも知られた。

筆者も柏市石鹼利用推進協議会の会長を委嘱されているので委員を連れて手賀沼の観察を行ったが、隣地の我孫子市石鹼利用推進協議会長で手賀沼漁業協同組合長でもある深山正己君(友人の息子)からその状況をきき、特に喰害されたホテイアオイの現場を見て歩いた。

成程浮遊している株は滅茶苦茶に喰われて網に囲われているのは網からくびを伸ばして届く範囲が害を受けていた。

但し調査が不完全で、ホテイアオイを喰害したのがカイツブリとオオバンだけで他の野鳥には関係がないのか、またカイツブリとオオバンは食料とするのみではなく、巢材にも使っているのではないかと疑問が残ったが、本年度に再調査を行うことにしているものの、一応報告しておきたい。

(1983.1.25)

山口県の新産地

南 敦

水草研究会報No.5 (Oct. 1981)「山口県のウキクサ科」において、山口県のヒメウキクサの産地を記しておいた。

1982年(昭和57年)12月26日、山口県吉敷郡秋穂町秋穂西、黒潟南、横浜社〔小郡-2〕の境内にある約3m×6mの池(沼)において、ヒメウキクサが二重三重に重なっているかのごとく密生しているのを見出した。他のウキクサ類が全く混っていない純群落であった。この点、いままでの発見地では、ヒメウキクサが他の多くのウキクサ類にわずかに混生していたのと異なる。このヒメウキクサは、この時期において、まだ寒さの影響を全く受けないかのようによく生育していた。表面は濃緑色だが、葉縁のみは紫色。裏面は紫色。根の数は3本の個体が一番多く、次いで2本の個体、4本の個体と続く。5本の個体は少ない。

秋穂町は山口県の瀬戸内では中央より、やや東によったところである。いままでの産地、即ち、萩市、岩国市、柳井市などはかなりへだたる。ウキクサ類は繁殖力は抜群であるが、害虫の被害をよく受け、コイやフナなどによるこんで食べられる。したがって、コイなどを飼育している池(沼)などにはないわけである。なお、今回採集したヒメウキクサ<35688、35689、35690>は証拠標本として、国立科学博物館、山口県立科学博物館等にそれぞれ1983年1月31日納入した。(注)<>内は筆者の標本番号。

○辻井達一・渡辺祐三編「北海道の湿原」(北海道大学図書刊行会、1982年7月、39頁、1400円)

釧路湿原をはじめ道東のいくつかの湿原をとりあげ、四季の風景や植物、鳥などを紹介した写真集である。「北海道の湿原」というタイトルをもつ以上、もっと多くの湿原を取り上げるべきであろうし、内容的にも、もう少し骨のあるものがほしい。

(角 野)

○陳守鉅、陸月蓮、朱成徳編著、*經濟水生植物* 農業出版社、北京、第1版第1次印刷、1982年、A5版、本文121頁、0.34元(210円)、